

博士論文審査報告

PUEL, Flavien

Apprehending the semiotics of global typography: A Systemic Functional Grammar approach of Japanese and Latin typefaces

(国際タイポグラフィーの記号論を理解する：日欧フォントの選択体系文法のアプローチ)

【研究の背景と概要】

心理学や社会学などとも学術的課題を共有する、人文科学の一分野、また学際的で広大なコミュニケーション学の中で、人間のコミュニケーション活動の根幹とも言える表象そのものを扱う記号論 (Semiotics) を、文字、文化が異なる背景で特にタイポロジーがどのように扱われ、意味付けされ、運用されるのかという観点、つまり異文化コミュニケーション (Intercultural Communication) の領域と兼ね合わせて調査、研究を行った結果が今回の論文である。

記号、特に印刷に使われる活字、タイポロジーがどのようにして生まれ、現在の形となり、どのような機能を持ち、またどのように研究課題として取り上げられているのかを知るためには、人類が作り、使ってきた表象の歴史についての知識を獲得、整理する必要がある。

壁画を含む象形文字の歴史は太古の時代に遡る。その起源は学術的に明確にはされていないものの、氷河期と考えられる紀元前 17,000~12,000 年のものであると思われるフランス南部の壁画に現在の「P」と似た文字が彫られていたといった記録も残っている。長い年月を経て東アジア (中国)、またヨーロッパのグーテンベルクの印刷技術の発明、普及に至るまで文字、特にタイポグラフィーはさまざまな変遷と発展を遂げてきた。記録を残したり、他者に情報を伝えたりするために作られた文字が、音声という側面を得て、また世界のさまざまな地域や宗教間の紛争といった対立の歴史によって多くの言語が誕生し、時にはたとえばラテン語とアジアの言語とは全く共通点を持つことのない、「相反する言語」とさえ考えられるようになった。

しかし、世代や国、地域、宗教、思想などを超えて他者に情報を伝えるため、またその目的を達成するために記録を残すという必要性、欲求は基本的には人類にとって共通であることは間違いない。したがって言語、特に文字がこれまでにどのように発展、変化してきたのかを探ることは、単なる言語学やコミュニケーション学の記録としての歴史にとど

まらず、現代社会の人間が、文化をある程度共有する者同士、あるいは異文化がせめぎ合う状況で、文字という人間のみが使うことのできる表象の本質を理解し、人間のコミュニケーションの特性についてさらに深い知識を得ることと直結していると言える。英語、フランス語、イタリア語といったラテン語を起源する言語と、日本語、中国語、タイ語、さらにはヘブライ語、アラビア語など一見似ても似つかない言語の間には一定、共通の規則、「文法」、そして機能が存在するとも考えられる。

言語学者、ハリデーは言語を「意味の体系（システム）」にとらえ、経験（直接、間接）によって習得した意味、対人関係上生まれたり、維持されたりする意味、テキストとコンテキストとの関係によって形成される意味などが複雑に交わりながら、複数の意味が体系的な機能を持つと考える。選択体系機能文法理論の中で、ハリデーはこれらを観念構成メタ機能、対人的メタ機能、それにテキスト形成的メタ機能と呼び、言語の意味はそれらの機能を通して与えられると主張している。言語をこれらの機能を果たす一つの体系として人間は見ている（意識的にではないにせよ）とすると、どのような言語を日常使用するかにかかわらず、活字に対する認識には一定の共通点や、母語の影響ではなく、性別や、年齢、経験などによって共通のパターンがあることも予想される。そのような研究は西洋の言語についてはある程度行われてきたものの、漢字、ひらがな、カタカナ、さらにはローマ字といった多種の表記法を持つ言語である日本語のように根本的に異なるとされる文字の認識を調べた研究はこれまでの記号論、コミュニケーション学では体系的なものは確認できていない。この意味で本研究は意欲的なものであると期待できる。

【本研究の評価】

本研究の目的は文字を記号論的「モード」（談話の関与者が言語に対して持つ期待を示す表象）にとらえ、日本語と英語にハリデーの選択体系文法論が適用できるかどうか、さらには濃さ、太さ、フォントの種類によって変化する文字の形が文化の境界を越えた、いわゆるグローバル的記号論的モードとして認識されるかどうかを検証することである。タイポグラフィ（活字）には意味を創造する潜在性があるという観点からのこのような研究は、デジタル化が進み、個人が自由に活字を使って多くの情報を発信することができるようになった、いわゆる「ポスト・グーテンベルク時代」と呼ばれる今日特に意義が大きいと考えることができる。タイポグラフィに特化し、さらに日本語を対象とした記号論的研究、考察はこれまでにあまり例がなく、その点でも本研究は大きな目的に挑戦したものとして高く評価できる。活字離れや絵文字の普及、また SNS の使用によって特に若者のコミュニケーションの形態が大きく変化する今日、人間の相互理解や情報伝達の原点である文字についての疑問点を改めて深く追求する本研究は地道で緻密な先行研究調査と、斬新なアンケート調査を使ってその目的を十分に達成している。

プエル氏は 400 本を超える文献を使ってこれまでの人類の文字の変遷と展開を解説している。特に日本語の表記、また漢字と仮名の歴史的変遷についての説明には、日本語を母

語とはしないからこそ起用されたと思われる新鮮で鋭い洞察力に感心させられる。先行研究の特徴を、200 を超える図表、写真などを使って細かく分析し、これまでの研究の流れに則って仮説を編み出し、302 人（内日本人 151 人、欧米人 151 人）に対して約 80 項目におよぶ質問事項から成るウェブ上でのアンケート調査を行った。これまで欧米の言語には選択体系文法（SFG=Systemic Functional Grammar）が適用できることを確認する研究が進んでいるものの、日本語というまったく異なる言語に同様のことが言えるか、という研究は行われていないため、今回の試みはその点でも画期的と言える。アンケートの構築、それに回答の統計学的な処理は杉山准教授の指導の下行われ、その簡潔ではあるが鮮明な説明力はこの論文の質の確保、向上に大きな役割を果たしている。

量的研究の結果、調査のために採用された 10 種類のフォントすべてについて「文法」が適用できることが確認された。タイポグラフィは単にサイン、印にとどまらず、ハリデーが主張する通り、あるコンテキストでさまざまな機能を持つ言語であり、文字の体裁を整える技術に過ぎないと考えられてきたタイポグラフィによって意味が変化し、さらにはどの意味のとらえ方は性別、文化の違いによって影響を受ける一方、日本語と英語とではその影響に一定の規則が存在することが分かった。タイポグラフィが日常どの言語を使用するかにかかわらず、それぞれの形、構造を通じて、テキストに何を期待するか、つまりモードとしての役割を果たすことが証明できたことは大きな発見と言える。もちろんタイポグラフィを目にし、それに何らかの意味付けをしようとする際、文化、性別、年齢といった要因が影響を与えることも同時に確認されたことも本研究の意義である。特に日本語、英語を日常の言語として使用しているからこそ表れる繊細なニュアンスや意味の解釈について、日本人と欧米人との間で大きな差が見られたことについても鋭い議論が展開されている。

プエル氏は本学に学部の交換学生として 1 年間留学し、その後ボルドービジネススクールで経営学修士号（MBA）を取得した。交換学生として来日して間もなく日本の書道に大きな関心を抱き、また食品のパッケージに使われる文字のデザインの日本とフランスの違いに興味を持ったところから今回の博士論文のテーマに、ごく「自然に」たどり着いた。単に博士号取得のためではなく、自分自身の興味、関心から発生した課題に取り組んだだけあって、本論文にはそれだけの情熱と意気込みが感じられる。宣伝・広告に使われるタイポグラフィとその影響について膨大な先行研究調査を経て構築した仮説を検証する研究を、説得力ある文章と画像を使って完成させた。英語を母語としないため、文法的、用法的なミスが散見されたり、文章がやや冗長であったりといった点は指摘すべきであるが、今後それらの点は容易にまた短時間で修正することができるものであると確信している。

これらの評価を元に検討した結果、本論文はプエル氏が今後独立した研究者としてタイポグラフィが持つコミュニケーション的機能や本質にとどまらず、異文化コミュニケーションの領域で他の重要な課題についてもさらに研究を進め、学界に貢献ができることを

十分示すものであると判断する。プエル氏に本学の博士号を授与することが妥当であると同時に、このような優秀な学生に本学文学研究科英文学専攻、コミュニケーション学専修から博士号を授与できることは誇りであると結論付ける。

主査 宮原 哲

副査 オルソン、D. L.

杉山 香織